

深海の先輩

群馬県立女子大学四年（群馬県）

出店 桃葉

あこがれの先輩がいた。先輩は柄杓の扱いがとても美しかったが、私より二つ年上だったので私が三年生に上がるときに大学を卒業してしまった。先輩の卒業から、もう一年になる。

高校で茶道部に入っていた私は大学でも迷わず茶道部に入部したが、タイミングが悪かったのか、私の代には私以外の新入部員がいなかった。そのまま一年が経ち、新型コロナウイルス感染症が蔓延した。ほとんどのサークル活動が禁止されて、茶道部に新入生はまたしても入らなかった。私はまるまる二年間、たった一人の新入生だった。

コロナ禍が続きに続き、今年で三年目になる。すべての先輩が卒業し、私は四年生になり、茶道部には四人の新入生が入った。熱心な先輩たちとお稽古をするのはとても楽しいが、お点前をしていると無性に先輩のことを思い出す。

冬の寒い日、先輩が炉のお点前をしていた。私はお客様

を務めており、一番近くで先輩の動きをじっと見ていた。

先輩の柄杓が音もなく水指に入れられ、深く一杯の水を汲む。先生は「お釜は底から、水指は中ほどから汲むように」とおっしゃって、先輩もそのようにしているのだが、その動きがあまりに静かで優雅なので、まるで深海から氷水を汲んできたように見える。ほんの数秒の柄杓の動きに、重く唸る氷山や海原を吹きわたる広い風のような、とても大きなものを感じてしまうのだ。先輩のお点前は何もかもがそんなふうで、私はお客様をしているあいだずっと水の中にいるような深い沈黙を感じていた。こんなふうになりたはずとずっと思っていた。

今でもお稽古をしていてその光景を思い出してしまうのは、きっとそれを知る人がもう私しかないからだろう。先輩は卒業し、同級生はおらず、後輩たちはその先輩に会ったことがない。私が目指しているものを誰も知らない。それがもどかしくてさみしい。角田光代著『私たちには物語がある』という本に「垣間見た奇跡を、忠実に再現し伝える義務が、信仰者にはある」という一節があるが、私はまさしくそうだと思う。私の見たあのお点前を、私はもう一度みんなに見せなければいけない。先輩のようなお点前をしなければ。そうしてお稽古に励んでいると、ふと茶道とは誰にとってもそのようなものではないかと思った。

お点前をしているあいだ、お客様の前には自分しかないな

い。手順を間違えてもチームメイトにフォローを求めるところとはできず、範を示してくれる先輩も先生もいまはお客様をしている。この瞬間、私は私だけで彼らにお茶を振る舞わなければならぬ。頼りにできるのは心に浮かべる理想の姿だけ……。それはとても心細いことだが、そういった孤独の中にあつてこそ私たちは「ああなりたい」と思い出し、自分を奮い立たせられるのではないか。私だけではない、先輩にとつても、誰にとつてもお点前の時間とは孤独で、だからこそ憧れを灯台にして、まっすぐに目指せるのだろう。その純粹さはとても気高いことのように私には思える。

最近先輩が住まいの近くの茶道教室に通い始めたと先生に聞いた。先輩は今でも柄杓を構えているのだ。先輩がずっと私の前を走っていてくれることが嬉しく、あの見惚れる手付きでお点前を披露しているのを想像すると自分のことのように誇らしく思える。今、私の夢は二つある。ひとつは先輩のようになること。そしてもうひとつは、ずっと茶道を続けて、もっともっと所作を洗練して、いつかお正客さんの先輩に私のお点前を、私の海を見てもらうことだ。